

**卯建 と 煙だし を 競い 合う 街 並み**



上田盆地を流れる千曲川の右岸、北国街道沿いに海野宿はあります。

街道沿いに軒を連ねる百件近い家屋のうち、半数が江戸期宿場町時代の建物といわれ、真直ぐな街道沿いに切妻平入りの家屋が建ち並んでいます。それぞれの家屋が、棟上の煙だしと卯建を、互いに競い合うように誇示しているのが印象的です。

北国街道は、中仙道の追分宿から分かれ、小諸・上田・善光寺を通して越後に至る、千曲川(信濃川上流)に沿う街道です。善光寺参詣客、加賀前田藩など北陸方面の諸大名、佐渡の金銀荷物などが往來しました。

明治以降、宿場は廃されましたが、代わって養蚕業で町は繁栄します。今に残る立派な家屋は、宿場町と養蚕業の繁栄により建てられたものです。



## 宿場町に共通する家屋造作



海野宿の家屋には共通する造作があります。

切妻平入り、漆喰壁、窓には堅格子の家屋が目立ちます。ほかでは見られないパターンの堅格子は「海野格子」と呼ばれ、出桁構造で二階を持ち出す「せがい造り」の家屋も見られます。

海野宿の街並みは、大きな「卯建」と「煙だし」が特徴的です。いずれも瓦葺の屋根をのせ、棟先に鯰瓦をのせたものが多く、時代が進むにつれ本来の機能を離れ、家格を誇示する造作になったようです。

煙だしは、小屋裏での蚕飼育のための気抜き窓が、大屋根の棟上に取り付けられたもので、厨房の吹抜け天井の煙だしが大きくなったようなものです。養蚕農家では良く見られますが、宿場町の棟上に並ぶ景色は、蚕種の生業で財を成した海野宿ならではのものです。



古い街並みが保存されるには、一定の条件があると思います。

- ・経済的繁栄に伴い上質な家屋が建築されること。
- ・その後の急速な困窮により建替えが途絶えること。
- ・早い時期から古い家屋の保存活動が始まること。

海野宿には、これらの条件が備わっていたようです。

江戸時代は宿場町として、明治以降は養蚕業により、経済的な繁栄を長く謳歌しました。

養蚕家の反対により信越本線の駅は置かれず、近代発展の芽が摘まれてしまいました。そして、昭和40年代の生糸産業の斜陽化に伴い、海野の養蚕業も没落していったようです。

同時期、宿場町海野の保存運動が早くも始まります。昭和50年前後から、市による史跡指定、宿場町保存の研究会発足へと続き、昭和62年の伝建地区選定へとつながります。



# 河岸段丘の発達した千曲川

## 海野宿場町はなぜ最も低い段丘上に築かれたのか



白鳥神社



千曲川

海野宿付近の千曲川河岸は三段に分かれ、宿場町は最下段にあります。

氾濫原(河川土堆積地)に近く、洪水被害も懸念される場所にあるのです。宿場町は、なぜ、より上位の段丘面に作られなかったのでしょうか。

これには、白鳥神社が関係している、と筆者は推測しています。

この地の名家海野氏、そして末裔の真田氏の氏神である白鳥神社は、少なくとも平安時代には、ここに鎮座していたとされています。

社前に広がる千曲川河原は、平家討伐のため木曾義仲が挙兵した地として記録され、白鳥神社は、この時随伴した海野氏の起源の地となりました。

戦国時代、海野氏は上位の河岸段丘面(白鳥台団地付近)に居館を構えたようで、付近には少なからず城下町が成立していたと思われます。しかし、海野氏の滅亡後、真田氏は上田城を築城し、海野から多くの寺社町家を新城下に移転させたので、一時的に古社周りは荒廃したようです。

しかし、激動の時代を通して、白鳥神社は河原横にあったのです。真田氏も、上田の新城下に移転することなく、勧請するにとどめました。

戦国時代の終息に伴い北国街道が整備され、寛永二年(1625)には宿場町海野が成立します。新たに宿場町を築くにあたり、古社白鳥宮を起点として、町割りがなされたのではないかと考えるのです。